

「一日目」――邂逅

主人公と澄羽が初めて出会う場面。

澄羽にとって、白布とそこにある命は、特別なものというより、ずっとそばにあった日常の一部。

相手を拒むでも、意味深に語るでもなく、当たり前のこととして静かに言葉を交わしている。

自分たちを怖がらず、目を逸らさない主人公に、澄羽はまだ名前のつかない興味を抱き始める。

沈んだ静けさはあるつつも、暗くしすぎず、感情を大きく乗せすぎない。

触っちゃだめだよ

まだ、生きてるから

みんな、怖いって言うの

わたしが抱えてるものを

……あなたは、そうじゃないみたい

また、明日